

20歳時点での恋愛経験人数についての意識

—神奈川県の一私立大学生を対象として—

若尾良徳・天野陽一

本研究は、20歳時点での恋愛経験人数についての意識に注目した。まず、20歳における平均的な恋愛経験の程度を、調査対象集団における現実の平均より過大に推測している可能性を検討した。また、20歳における理想的な恋愛経験の程度を調べた。さらに、若者一般における理想の恋愛経験の程度を推測してもらい、現実と推測の間にずれが見られるかを検討した。大学生157名（男性73名、女性82名、無回答2名）を対象に、恋愛経験人数についての意識について質問紙調査を行った。20歳時点での恋愛経験人数の平均については、男女どちらに対しても調査対象集団における現実の平均よりも過大に推測されていた。理想人数については、男女どちらに対してもおよそ3分の2の回答者が2人または3人と回答しており、9割が複数と回答していた。さらに、若者一般の理想人数について、自分の理想より高く推測していた。このような年齢意識が若者に及ぼす影響について議論した。

キーワード：恋愛経験人数、大学生、20歳、年齢期待

問 題

現代の若者にとって、恋愛は非常に重要な関心事のひとつである。たとえば、ORICON STYLE (2006) が2005年度に新成人となる200人に行ったインターネット調査では、「欲しいもの・かなえたい事」として男女とも「恋人が欲しい」が第1位となっている。また、高比良 (1998) による大学生を対象にしたライフイベントの調査では、ポジティブ、ネガティブの両側面で恋愛に関する事柄が数多く報告されている。

このような若者の意識を反映してか、若者の実際の恋愛状況も活発なものとなっている。恋人としてつきあうということがカジュアル化し、現代の高校生にとっては異性との交際経験があることが珍しくなくなっている。たとえば、高校生女子のおよそ半数に過去現在を含め恋人がいた経験があるという調査結果がある (中村・原田, 2005)。また、現在の若者は

短期間で交際相手を変える傾向があり、そのため比較的若い時点で累計交際人数が多くなっているといわれている(木原, 2006)。

恋愛が重要視され、恋愛が活発となっている社会において、現在の若者は、同年代の恋愛の状況を、実際よりも過大に認識していることが示されている。たとえば、大学生や専門学校生を対象とした調査では、同年代で恋人がいる人の割合が過大視されていた(若尾, 2003; 若尾・勝谷・天野, 2003)。また、ある程度の年齢以降、恋愛関係は性交渉を伴うことが多くなると考えられるが、大学生を対象にした調査においては、20歳時点での平均的な性交経験人数が現実より過大に推測されていた(若尾・天野, 2007)。同様に、専門学校生を対象とした調査では、性交経験率が実際よりも過大視されていた(若尾, 2006)。本研究では、過去に交際した恋人の人数においても、実際よりも過大に推測している可能性に注目する。

さらに、若尾(2004)によると、恋愛経験がないことは非常にネガティブに評価をされるが、その一方で、恋愛経験が多いことも、ネガティブに評価されることがある。それでは、恋愛経験はどの程度が理想的とされるのだろうか。性交経験人数については、望ましい人数が共有されており、大学生を対象にした調査では、およそ半数の回答者が20歳時点では2人または3人が望ましいと回答していた(若尾・天野, 2007)。性交経験人数と同様、過去に交際したことのある異性の数についても、ある年齢で望ましいとされる程度が共有されていると予想できる。そこで本研究では、若者が恋愛経験はどの程度が理想的であると考えているのか、さらに同世代の若者においてどの程度が理想的であると推測しているのかについて調べる。

すなわち、本研究では大学生を対象に質問紙調査を行い、便宜的に20歳という年齢を設定し、20歳における平均的な恋愛経験の程度を推測してもらい、調査対象集団における現実の平均より過大に推測している可能性を検討する。また、20歳における理想的な恋愛経験の程度を調べる。さらに、若者一般における理想の恋愛経験の程度を推測してもらい、現実と推測の間にずれが見られるかを検討する。

方 法

調査協力者 神奈川県内の4年制私立大学の学生157名(男性73名、女性82名、無回答2名)。平均年齢19.01歳($SD = 0.85$)。

調査項目 (1)20歳において過去に交際した恋人の数について、次の点を男女それぞれについてたずねた。(a)平均人数の推測、(b)自分が理想だと思う人数、(c)同年代の若者一般で理想と

されていると思われる人数の推測。(2)現在の恋人の有無、過去に交際した恋人の人数についてたずねた。その他、本報告における分析には用いていないが、いくつかの項目に回答を求めている。

調査手続き 「若者の恋愛や性に関する調査」と題する調査の一部として実施した。調査票の表紙に、調査の目的が「若者の恋愛や性についての実態や考え方を調べること」、「若者の現状を理解し、問題を解決していく手がかりとすること」であると説明した。調査は、2004年10月に実施をした。講義中に質問紙を配布し、その場で回答を求め、回収した。回答者のプライバシーを考慮し、回答に際して、試験と同様に座席を1つおきにして座るように求め、他人の回答を決して見ないように指示した。回答は授業の単位とは無関係であり、回答するかどうかは自由であり、回答したくない項目があれば、回答しなくてもよいと説明した。また、調査は、無記名であり回答の有無を判別できないことを説明した。実施に際しては、質問紙と共に口糊付きの封筒を配布し、回答済みの質問紙は封筒に入れて封をして提出するよう求めた。回答済みの質問紙は、調査実施者が回答者から直接受け取った。

結 果

平均人数の現実

調査対象者における恋愛経験の平均人数は、2.03人 ($RANGE = 0 \sim 12$, $SD = 1.99$) で、性差はなかった ($t(153) = 1.75$, $n.s.$, 男性 $M = 2.06$, $SD = 1.85$, 女性 $M = 2.01$, $SD = 2.12$)。また、調査対象者のうち、20歳の者 ($N = 35$) の恋愛経験の平均人数は、2.14人 ($RANGE = 0 \sim 7$, $SD = 1.88$) で、性差はなかった ($t(33) = -0.77$, $n.s.$, 男性 $M =$

Table 1 男性を対象とした20歳における恋愛経験の現実と理想、およびその推測

	現 実	平均推測	自分理想	一般理想
0 人	22.7%	0.6%	1.3%	0.0%
1 人	27.3%	0.6%	7.0%	5.7%
2 人	9.1%	14.0%	28.7%	15.3%
3 人	27.3%	38.9%	38.2%	34.4%
4 人	9.1%	15.3%	12.7%	19.1%
5 人	0.0%	17.8%	7.6%	17.2%
6人以上	4.5%	12.1%	3.2%	7.6%
NA	0.0%	0.6%	1.3%	0.6%
平 均	1.95	3.80	2.91	3.55
SD	1.76	1.53	1.23	1.44

注) 小数点以下の推測値は、四捨五入して計算した。

Table 2 女性を対象とした20歳における恋愛経験の現実と理想、およびその推測

	現 実	平均推測	自分理想	一般理想
0 人	23.1%	0.6%	1.9%	0.0%
1 人	7.7%	0.0%	8.3%	6.4%
2 人	30.8%	10.8%	30.6%	21.7%
3 人	7.7%	40.1%	36.9%	36.9%
4 人	15.4%	17.2%	10.8%	9.6%
5 人	7.7%	20.4%	6.4%	19.1%
6人以上	7.7%	9.6%	3.2%	5.1%
NA	0.0%	1.3%	1.9%	1.3%
平 均	2.46	3.84	2.81	3.33
SD	2.11	1.48	1.28	1.43

注) 小数点以下の推測値は、四捨五入して計算した。

1.95, $SD = 1.76$, 女性 $M = 2.46$, $SD = 2.11$)。現実の恋愛経験の分布をTable 1、Table 2に示した。

平均人数の推測

20歳における恋愛経験の平均人数の推測は、男性については平均3.80人 ($SD = 1.53$)、女性については平均3.84人 ($SD = 1.48$)であった (Table 1, Table 2)。回答者の性別と推測対象の性別により差異が見られるかを調べるために、2要因の分散分析を行った。その結果、回答者性別と推測対象性別の交互作用効果が見られた ($F(1, 151) = 14.03$, $p < .001$)。男性回答者においては、女性についての推測 ($M = 3.91$, $SD = 1.56$)の方が男性についての推測 ($M = 3.46$, $SD = 1.49$)より高く、女性回答者においては、男性についての推測 ($M = 4.07$, $SD = 1.52$)の方が女性についての推測 ($M = 3.77$, $SD = 1.42$)より高かった。

平均人数の現実と推測の比較

推測された平均人数と20歳の調査対象集団における実際の平均人数とを比較した。推測された平均人数と実際の平均人数との差得点について0からの t 検定を男性回答者、女性回答者別々に行った。その結果、男女どちらの回答者も、男女どちらについての推測も現実より有意に高く推測していた ($ts = 7.85 \sim 12.59$, $ps < .001$)。

自分の理想人数

回答者自身が、20歳において理想とする恋愛経験は、男性については平均2.91人 ($SD = 1.23$)、女性については平均2.81人 ($SD = 1.28$) であった。2人または3人と回答した者が多く、その割合は男性については67.7%、女性については68.8%であった (Table 1, 2)。さらに、ほとんどの回答者が2人以上を理想と回答しており、男性については90.4%、女性については89.8%であった。

自分の理想人数について、回答者の性別と推測対象の性別により差異が見られるかを調べるために2要因の分散分析を行った。その結果、有意な効果はみられなかった。

若者一般の理想人数の推測

20歳における恋愛経験人数の若者一般の理想の推測は、男性については平均3.55人 ($SD = 1.44$)、女性については平均3.33人 ($SD = 1.43$) であった。回答者の性別と推測対象の性別により差異が見られるかを調べるために2要因の分散分析を行った。その結果、推測対象の性別の主効果が有意であった ($F(1, 152) = 6.73, p < .05$)。男性に対する若者一般の理想は、女性に対するものより高く推測されていた。

自分の理想人数と若者一般の理想人数の推測の比較

自分の理想人数と推測された若者一般の理想人数との比較をするために、男性回答者、女性回答者別々に対応のある t 検定を行った。その結果、男女どちらの回答者も、男女どちらについても、若者一般の理想を自分の理想より高く推測していた ($t_s = 3.35 \sim 5.12, p_s < .001$)。

考 察

本研究は、大学生を対象に、20歳時点での平均的な恋愛経験の程度について、調査対象集団の実際の状況とその推測を比較し、自分たちの恋愛経験の程度を現実より過大に推測している可能性を検討した。さらに、20歳において理想と思われる恋愛経験の程度をたずねるとともに、自分の理想と同世代の若者一般の理想についての推測との比較を行った。

20歳における恋愛経験の平均については、男女どちらについても調査対象集団の現実より多いと推測されており、現実を過大に認識していることが示された。先述のように、現在の若者は、恋人のいる人の割合や (若尾, 2003; 若尾・勝谷・天野, 2003)、性交経験がある人の割合 (若尾, 2006)、性交経験人数の平均 (若尾・天野, 2007) を過大に認識しており、

恋愛や性の様々な側面において、実際の状況以上に同年代の人々は経験があると考えているようだ。また、恋愛経験の平均の推測には性差がみられ、同性よりも異性の方が恋愛経験が多いと推測していた。このような性差が生じた理由としては、情報が少ないためにより過大に推測してしまう可能性が考えられる。同年代の恋愛経験については、その情報源の1つとして周囲の友人や知人の状況を見聞きすることで推測しているのであろう。同性の恋愛経験を推測する際には比較的情報を得やすいため、異性について推測する場合より、現実を踏まえた推測をしていると考えられる。

理想の恋愛経験人数については、7割弱の回答者が2人か3人と考えており、理想的な恋愛経験の程度が若者に広く共有されている可能性が示唆された。また、およそ9割の回答者が、理想人数を複数と回答しており、20歳までにある程度の恋愛経験があることが理想とされているようである。さらに、現実の平均的な恋愛経験(2.14人)からみると、多くの若者が自分は理想よりも恋愛経験が少ないと考えているようである。

先述のように、恋愛経験がない人は、非常にネガティブな評価を受ける一方で、恋愛経験が多くてもネガティブな評価を受けることがある(若尾, 2004)。また、本研究の結果から、多くの若者は同年代の他者より恋愛経験が少なく、自分や世間の若者の理想に届いていないと考えているようである。このようなことから、現代の若者は、その年齢において適切とされる恋愛経験をしなければというプレッシャーに晒されているかもしれない。今後の課題として、このような年齢相応の恋愛経験をするというプレッシャーに若者がどの程度さらされているか、またそれによってどのような影響があるかを検討していく必要がある。

さらに、理想とされる恋愛経験が複数であるということは、現在の若者は、1人の相手と長期間交際を続けることを必ずしも良いとは考えていないのかもしれない。もしそうであるのなら、1人の恋人と交際を続けている期間はどのくらいがよいと考えているのであろうか。また、恋愛経験があるということ、恋愛をしているということ、恋愛を当然と見なしているということは、現在の若者は、恋人がいない状態があまり長く続くのは望ましくないと考えているのかもしれない。もしそうであるのなら、どのくらいの期間が限度であると考えているのであろうか。今後は、このような恋人との交際期間や恋人がいない期間についての意識についても検討していく必要がある。

引用文献

- 木原雅子(2006)『10代の性行動と日本社会』 ミネルヴァ書房。
 中村恭子・原田曜平(2005)『10代のぜんぶ』 ポプラ社。

ORICON STYLE (2006) 「発表！新成人の欲しいもの・かなえたい事ランキング！」

<http://www.oricon.co.jp/news/ranking/8211/>. Accessed January 6, 2008.

高比良美詠子 (1998) 「対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討」 社会心理学研究, 14, 12-24.

若尾良徳 (2003) 「日本の若者にみられる2つの恋愛幻想—恋人がいる人の割合の誤った推測と、恋人がいる人へのポジティブなイメージ」 東京都立大学心理学研究, 13, 9-16.

若尾良徳 (2004) 「恋愛経験ステレオタイプの検討—日本の若者にみられる恋愛普及幻想と恋愛ポジティブ幻想(7)」 日本心理学会第68回大会発表論文集.

若尾良徳 (2006) 女子短大生にみられる性体験率の過大視とマス・メディア接触による影響 和洋女子大学紀要人文系編 No.46., 71-82.

若尾良徳・天野陽一 (2007) 「20歳時点での性交経験人数についての意識—神奈川県の一私立大学生を対象として—」 思春期学 Vol. 25 No. 1, 76-181.

若尾良徳・勝谷紀子・天野陽一 (2003) 「現代の若者に見られる性体験率の過大視とメディア接触の影響」 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 814-815.

若尾良徳 (和洋女子大学人文学部発達科学科助手)

天野陽一 (東京都立大学人文科学研究科博士後期課程)